





題詠と心ふるやいとまをより和
ひよるゝとそとちいさのやうく
遊のまのそくれはとうとあけつるふくも
何れ能諧のそ白はくさるや保談平祐を
用るといへともこれ種を交ふるをさすや
あさふのいあ證と人のふさるもの母ふみとの
松きこれやおく遊の保掌のなはくさるを
あれ歌詠とふおちくはゆさる保として
曠野をさるあさる心ち弱さいつたあまをさる
ことをりやをんさ證を是非いさふいさる



子て可ふ可いふ二ちめせも流おし人のいひ
おらるをむ入あはれや今此の念を白の鏡り
ををつをらとておとせと企て居二三子の事
便は神の縁こい甲の海をいぬて外におおす
原るの縁の通をうめそ内子精と氣をてけり
縁原のふらつ子かひんをうめそ油(縁)
すへつすそらあをさば一知りしつらひ
新去一思をう細う候かよき

天保乙未書雲日後一日

左 持

二三夕夜ふ入るむ歌をぬの縁 史子

右

去地の名も遠く至小野や都をぬ 貞祇

左は北の直は昔もきのふとて那徑
遠あすもふ夕陽正在断橋邊と作り詩の
風情をふらみて一句のちうへ縁を重
右上の文をみて遠く見たりとてル一と
一同の玉の魄をなるへし縁と和音の名不
を解るるをうへつら依以為持

丸 勝

暮あむの丸々の暮るの丸るのり春一 昔仰之

右

松ゆふ弓弦ゆゆるのゆまう肌 荷了

丸を色十二分の光景を景を待候して

あきくうのじふ尔紫自然に延りておの望のあと

なく句意又自然の気味あり

右山櫻のやふころひ加り一ころ一社を京

の流々流々すすきかこころりされと弦り

音のそまはてひるあひまのさーやへうさく

おもはゆるをよへ原とささめたる金作

をの不福みて教生のむらいと

あきくう知るる一

丸 拵

東と流も先も雪あむや川原橋 田華

右

とらく一て一々もねまあう教 由哲

丸下子の河原橋ふようあり

右上五りどらく一てふちああり

とよまうく下ふま入るあうとも

中へまや先もあくあまれく

能一箇の句たる一

左 拈

あゝ海や雲の外のまわれ又 栞屋

右

初を病々ぬ顔り向ふく又 松莊

左 荒海の外子知なりと見えし

不變真如の當体

右とのあゝこの存々ぬう下の意あり

陸縁生ぬとち中へくや

煩悩即菩提とすゆれ善悪不二

左 勝

蕨陰や雲のりまゝり 著てり 凍梨

右

雲むむや屋松より崩す車小屋 一具

左 麥壠蔬畦の蕨うけのりききかみあら
もれてたくみけは又正風すちこ

右 屋松取崩すとくくまうけくく一ふありて
中ゆれとたーくふちぬの題とくくめくく

みや巧詐不如拙誠と心ふ

本文もあれい急度頁こ

左 線

火をゆきいばと川 鳴らつてはれ 由振云

右

鳴鐘なるぬ 鐘もあがりーらま 音なり

左 枕鉢尾のうりあてうちくとを打せし
くまよおのうたやひとつ 鐘をいひてのまよ
よう〜あや

右の鳴鐘は左のうらよさそをわけてなるぬ
鐘もあよりぬハニの鐘一こ

左 拵

鳴らぬハこを〜くまは井あり 史千

右

左の先此 擬不ののなり遠 鐘 椿屋

左 右とも子咲のさる一作ありてや也
井の鐘ハお田やのふ遠鐘ハ大まうこ
通ふ存の中をぬて拵と云

九 坊

庭草不初彦出不以種可那 一具

右

糝伽桶を飛出—て写種ら 奈 貞祇

糝粘瓶もたぐいぬき控人のねり地荒
さる庭子おのりふえ新子初彦おほし
新緑總深雨乍乾細聴鼓吹客衾寤と不
聞種詩のれいふもあひまや

右又おほやうみ新ひすまゝる尼法佛の程
伽桶の権ものきんとてあまを種をさしせし
うの物あおてりちくと写めらひなしくありハ
取ッ色青くてあうのふとやらなる方ある—
九太とも不自他平等の蓮世をたれい持ともやへ

九 務

曇て—く—まういる や 嘩 種 凍 梨

右

舟えや—写やむ種鳴ら七川 常之

左一句の—ら目立—も尺へねと路向の
新し—ふあ—や何とあ—

哉あめてきふゆ

右舟えや—と虫—を—られ—と新あ
新をも何とれくと—と—と種ハ啼種
写やむ種ハ何となく—

左 持

よくつハきりの持をぬむらう松 松 庄

右

ぬさるふらさなる時りむの奈 田 幸

左 師 曠 聰

右 離 婁 明

共子感ふらく作奇之評を可うとく
眼志ひて甲乙とら加さしは名ぬさる

左 持

朝風や境のむを吹ましく 斎 之

右

ぬさるふらさなる時りむの奈 横 屋

氣田河の氣格とんとく薄出さる母中よハ
うの葉下とらひふま折もあるし境なる
本反の葉持よひまきぬ突の下をも焚
はけぬあ海みや
右ハ人も訪来ぬま尾の作書簾茶器並
も白やふまへる

たいをれくくくハ淋し
蠻觸のそり猿負をこころんや

左 縁

果もさぬうちうら花の琴の那 田草

右

何きう祝又娘むり時あられ 凍梨

たむをさるる心の厚き句の表よあふれて
作そのあはれもあつし

右 縁 帳の園のあはれは松ふ護む終とう
心よのくく付風もなまなま子尾の長
きる故のくれちあふるまとの飛めくる
さる古よ物護まかふるしよあつしねる
あありと覚へてゆー

されと左のほのうら此さういふよりほん
あはれさるる心の厚きよの縁もく
あひまきしへうとてあ縁

左 縁

ちとをりのむよふたる 塙松の家 史子

右

はきのるうらむむれくちりや那 松庄

世下子山補なる人もむみハ世なるうら
みそ塙松縁保るる心とくおあくこそ
右もハきのるれふとくよにくまよ又他意
よも縁れと塙松のむみハ
ちとをりのりおとあつてゆ

左 持

舟場うらあるともく子も見え来 荷ろ

右

植木屋のふりーてりや花やーと 貞祇

六田のさしりみわし(注)のさしりみわし(注)
うらあるともく子も見え来

一句やまきこつふーてりー

右句まきこつとさぬやうふゆへて入れと

一休ゆつよまきこつてりて

真角の風景あり故に以て持

左 猿

新 棚 もうさりたけーや 毛 笠 一 夕

右

そのふんーまのりふあ流逆哉 由松

まのりふあ流逆哉
さあふんあひありく人情おされあ流逆哉
まのりふあ流逆哉

右のふんもくりて後ー櫻の山川の
たやま流枕おさるしふよとみまやま
流逆ゆく光陰を悟るまのりふあ流逆
まのりふあ流逆とさあふんて悦びの
まのりふあ流逆

新 棚 照あるまや

左 縁

見も又さつごり物やちとまは 貞祇

右

切畑の女子ハ 傾きて可哀 一具

一句のまじりて 羨み邁より方あり 不流至
弟二念といふ 禱をのまえり

うなひてめて

右 眠るまじりて たる 晝の元おし 誦
一巻のまじりて 趣向に入出せられ 一本
傾きられ 作裁さめあり 一しされと
わら 幾れ 幸しくと 弟二念より
この作はれ 左を 弟一 次第

せま

左 縁

何とよき 縁 釣する 赤い 豆くつき 由哲

右

不世とよき 縁 高き 中 邸 菜市 ちり之

左 縁 釣する 赤い 素こき 豆くつき
くみぬをくく の だく 豆くつき

一巻のまじりて 趣向に入出せられ

右 縁 市 の まじりて 趣向に入出せられ
乞又凡の あり ねと 評を 釣 縁 赤い 豆くつき
とて 見 到 せ ぬ とも あり ちり 之
作より 八巻くつき

~~~~ 海よき 侍

左 持

寶とく 幾まの星ハ世百子 孫れりり 桂屋

右

田と畑の 是れりこころ 七本とさきあ 凍梨

灰耐きののせりまおそれあめくともみち  
あつはてあつあんのこころ六境よりあま  
をしめて静る静るすとほりまきこころ

よき炭煎の白とやし

右さきこれの晴るさつねてちとさき  
そと并子つらあやしたこのこと西行上人の  
なうめさきひし一帯外のりてあつ  
さき子中の其方さきふくして

新日国産をあらもさきをしほひける

左 持

一帯のころあ木保一帯とさき 松庄

右

風炉は炭清て仕舞 娘保也いふす 荷了

左一帯子木保一とハ先ハ趣向縁に  
一句さ下してあつ 満ら凡

右院想結とひて風炉の炭ハ炭丸  
ともまきこころ けぬさきしきり  
丸者名味ちあつとさき

あ持

き 縁

子規あつとあつと——下り縁 文千

あ

ひとらこ——糸おくれりり 田華

左中七文字子葉休のなまら

右の句一——おくれて追付

こし——あつとあつと——風鈴はあれと

こし——あつとあつと——あつとあつと

あつとあつとあつとあつと

おくれとあつとあつと

左 縁

紙 園 言 七 庭 木 洗 糸 出 づ け ぬ 凍 梨

あ

紙 園 言 七 庭 木 洗 糸 出 づ け ぬ 凍 梨

た夕涼をけと糸見子とるさか人あ

おくれとあつとあつとあつと

右園言七庭木の洗糸を従さるる作

とま中へきこありきこりのあつと

よめハ一桶のあつとあつと

樹を洗ふさかあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつと

左

な 埃うや糸のしりぬ通りすち

一息

右 縁

縁 言やふけさられぬ糸の帯 田華

あふの山の通り糸の埃うのまじり  
あふのうらめつ〜とくもあへん  
右伏見街きみうちつきて色もさめ  
あへぬ春あつきのもあひ  
つよりれはふけて通るこ〜

左

横町や長刀絆のなりうつり

貞祇

右 縁

縁 言や和文とわか青い屋

ね 荘

左横町のなれうらむるさか能き〜  
のり〜支能いひうら〜  
右や〜とれき上臈のまのひて糸見え  
〜とれきあふや鉄燭玉蓋のもてれ〜  
と〜やうみ〜てまき屋の内此  
何とあ〜や〜り〜れいひ縁

左 猿

祇園多乃埃うさきぬきる道山 文子

右

祇園多やんあつる歌人なり中 内装

左埃りの孝目おこし〜埃りまある〜  
蒼歌埃の百埃子あつて一心紫雲〜人埃く  
〜山此あ〜りも笛鼓のさ〜入て志つ〜なら  
〜と風粒子粒神をち〜り〜作その心〜  
右も又書也上人の市のさ端〜ありて心の汚れ  
さ〜る子をお〜ひよきて此作意〜し評考の心  
笛を鼓子〜り〜れて心田〜り〜れ悟道の  
聖の〜れを志〜り〜ぬ風粒人  
節撰〜はる

左 持

祇園多やち〜り〜又家をす〜通〜 節之

右

祇園多や西瓜も〜り〜唐新 桂屋

ちの〜き家のみ立〜ぬい〜見此  
〜の心〜きよく  
人信を〜して〜  
右西瓜の唐新は又眼あ信はて  
つ〜つ〜と〜ら〜き〜  
中〜を〜て〜以〜持

一具香袖評

九

舞のふ子這ふ庵の柱のれ 一具

右 縁

朝鳥子おくるし 標の藤薨れ 松花

左世子こののりまものよそありなるとい  
 うるはる廻ひをいふなるべしとて感あり  
 右舞ハ涼みなりし縁を冷まおとらへ  
 るを下いふくめる作あり  
 又心づかれは縁とおきて庵の寂をいひ  
 こまは籠子よきて標の表をいふちして  
 縁反をこまはと標りぬ風子  
 ちまをいれてないさぬ

九



丸

塀あひひの角うむちさく笑みり

田草

右 縁

いさう不子屋さくさく取家のひとけ 岸り

丸ハ市中の隠して其の人のあはれ

さあさもおもひやうるれと

右此塀の比とへいところやうま

中更ありとおる也

丸 持

角龍を足てくつ流きぬよそ此花

坐城

右

目子うゝ縁報良をやく潤みり 楳屋

や何某う下のあとなをあれ一花流  
の人よや此をみむらひて我やとの垣種を  
おもはやさるるさるせす也

吾 鋭者夫とのやう此花いもせよめさう  
はしよりうへ子わきて色よ流うとくささ  
矢るをいへるうと流あり

尺てらつらるる目より流もを  
いささあゝささりて持と流

左

いさゝのほも 塀もつくや 組屋敷 昔之

右 縁

朝の本の 写さこゝる 佛 百廿 貞祇

た子 糸あゝりの 夕顔い ちよむ人の 目子  
つくまひりて 組屋敷の 暮ハ 眺階を  
の 目子とる 遊るうとを 一

右 柴火よさくらりて 樹くくちちとる  
心をすまさんど 花屋敷の 遊るまむの  
ういさの 目子入るも あやみくじ  
眺めの 組屋敷とさるる 早ねさる  
尺ぬういさの へぬさるる

左 持

義子よめ 泣つきぬ 井戸の 端 凍梨

右

葉や 薔く 咲てる 乃 巾 史十

左 花の 詠子むをそ ちなひ  
右 花の 詠子むをそ ちなひ  
ともよ 哀ふの くて  
縁 原をわの ち

左

雲霧りくく入まき月一夜 暮り

右 縁

うき此頃の痛ぬ音するや此の月 栞屋

左 新月の光景よくいひ々ほ入言  
カあまどとささしるる子あはし  
右 雲の痛ぬ音あて仲悔の佳光を  
ゆきくるる音あは縁をとれり

左

よきついでさるや月見のなぬより 史十

右 縁

月し海や河原さるうみ人のさつ 由拵

左 や久しう詠めてさみし人のさるを  
下の子又孝子おぢて風味あり  
右 雲ぬらうり月を結るる人のさる  
中 七文孝子あらをれて粒味あり  
志をく縁負さるるあまのさる  
たのめを佳いさるあつ人を  
縁とれ

を 縁

名月や神の灯の橋よりつる

松 庄

右

木く此景をやり出す月のうつら

凍 繁

左ハ灯の橋よりつるをいひ右ハ木の  
橋より月此うつらさるやゆり出すとよそ  
ふ残るをいひと月の光り残さし  
おいえ灯のうつらとお一つ希し

ふつよさよなりぬ

左 持

名月や柳の種おく垣 障

菅 之

右

白くれとやまぬ子月や燈の光 一具

左何う種おくと月をよそふいひ  
さるやうなれと秋風情をのよさ  
してよ

右白くれ色止ぬみと月をいひ  
さしやうなれと秋の光よりいひ  
甲乙をいひと月をいひとて  
白よさく名月よりとて吟つ

仍以為持

左 縁

人届りて噺のきかぬ月見草

田草

右

名月やけとあとのわかれうち

貞淑

左 居士の墨畫を海邊のあと子にあふる  
其の鐘を子にあふるは 鷗鳴をきかぬうち  
うさくらうまをわかれ  
右 重波玉をうらゝ照わたりしうら  
らし又志くも感あゆま 程と評を百丸の  
名を帰るる 咄母はねい  
左をどれめとくむるやうな遊

左 持

新匠くむ門や蓮子をまき竹

凍梨

右

向子 狭うけて新編をそけいぬ

由振

左 此家のあしりをたきよひの  
くさる子際草しくとて 糍  
右 向子 狭うけてと作呈されと其味子  
なつむまありけりとして

のまがんれ

左 持

色とよのまへさめあぬ新酒也

桂屋

右

鉄器を煮へ残りもあける新酒也

貞祇

左はさめあはる

右はのこれり

引かて持とほ

左 孫

火を切てふ口あはる新酒也

田幸

右

海魚うちまうはすこのまゝ新酒也

寿り

左は心あこもる生さぬ先をいひ

右は心をさする生さぬ先をいひ

うすみのすまはたとおめり

やらのれとあはる新酒也

おろしとあはる

左 縁

事て破て破て陶屋——新酒井

第之

右

さほうら子 端法とちうは身ほ

松岳

左 破やすくさめやすまをいへるハ作  
をと下戸ちぬみヤ

右 されらうら子 端法もど同く裂り  
かのめき——情さのへらちあめくを

まぬらぬ人うとあつり——ぬみあ  
ねと古人も下戸ちぬみそ穿ちあられせ

いさもて

左を縁とさるむ

左

右 縁へも一ち——新酒井 丈千

右 縁

子福酒や先井戸神へ一ち——一具

右 鞆の一ち——ちおのつらうらる

井戸神の一ち——ちわきと備へ

いさもてらのもやうをうられり

さへいたうら新酒井茶のさもほらう

縁と井戸の底をうられり

いさもてら

あさよりとす

左 猿

待重や矢を射て遠近はなるは

凍梨

右

毒のふゆいさねとなくや花の香

貞紙

左のうめよ衣士等の船持きし後  
みやとありあつひひるてより

右のうめよといへどくくやといへどお人の  
白き一變して力ありきんと程回る  
此端のひぬんをまつらりまよ

左の矢をいひあて

くめとん

左 持

菜畑やまゝら子雲の霞をいめ 由哲

右

初言ふつるや花の香はあり 松莊

左の菜畑を六種のうち此種を  
よきてまゝとて色はけしれ  
右の菜畑は六種れうちの蜂穴を  
よせてうつるともはしるや

のまゝの霞のまよ子雲の霞をいめ  
これら初言のまよ子雲の霞をいめ  
つてまおいて甲し



左

まつく子まゝ元へて雪のさと 枯屋

右 孫

降きや本質拂ふて困が裏端 一具

左一片の鏡を界と集て晴あつる  
田家此さるに里ハ何れとさしてはねと  
さしつ子少して小きの森をさるはとを  
身子ちやう

右一歩さく先新文攢々聚四の驛路  
乃俸こさるさなうしね被六敷のさし  
子あつるさの障ななはと口ささむ人あ  
へし縁原押れささるねとまゝ元へ  
起子さるに障りなれは障雪のさし  
うせさるか

さ

こなるうハお母進て積ぬ井此雪 史子

右 孫

雪ちりりく 鶴の巣さくくさるし 為り

井のさしちひ子あり藤すの藤もさふ  
へきことさあうしつねせいへさあてよく  
等敷道ののれてはさるさる  
右さきの巣さるくさしてちりりつくとを  
あふむくさるをんさるめはさるさる  
きれ陰とち気等をや中へしちら井の  
すく備れるより鶴の巣ひやうなるを  
あささる先

左

振て尺の神の位初や木の香 田草

右 猿

秋草子とめ落されて 谷の雲 節之

左 像うつもぬ 雲を志のるみい  
海はうそいとゆめれとみれ草子  
そらうつを越しむる海を  
このむ人の上みらん

左

賣きぬる魚屋の尺をも葉草か 松莊

右 猿

層のぬりちみく音して月のくれ 凍梨

左 志をむる市中の風情を草切  
魚みてとれなせしむるよ上よ  
右 志をみたる遠くゆきの香もやしく  
里は遠くちのくとせをうらみせうて  
葉はゆりなんとおもふもあつて再ちう  
りれを猿とす葉屋の尺世ハ  
こゝれハ葉ハ

左 縁

石白の下をうごめくとの縁 一具

右

人比どり来ぬりくればかき年日暮 荷り

左言外の餅情 売菓子 壺一 籠一  
ことごとくひぬ進と乳鞋子 元也のうけ  
あいきとひとつ子味あへー  
右ふくれ 木の 呆寂も 凡たうぬと  
人比どり来ぬも 石白をうごめく  
るあこりん

右

掃よさるの帚 此う流ーこーのさる 回華

右 縁

左の 硯くなくて せーのうれ 桂屋

左の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の  
あん子の 帚 此う流ーこーのさる 出ー  
こーの 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の  
右の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の  
硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の  
硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の  
硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の 硯の

左 猿

居るまゝハ一巻してし一巻のくま 史子

右

初ねては片挽きや幸のさう 音子

左 齒朶様を道子坊へ餅まき菓ハ  
登りてよせうら悦こ

後室御之あり

右 燈燭をうやまよら頼みせし  
夕餉もおそろするさ一巻の芳葉ハ  
片挽き菓もく一巻の巻ハ  
志くいありと猿子さうらむ  
誦をのめくとしてるしぬ子や

左 猿

逢物子指の泣つく葉まけ 貞孫

右

森心やあるう中も幸れくま 由哲云

左 一句のあふりふりふりさつろえ指れ  
誦もつくと一巻の木の葉さく白く  
右 うちや子阿さくさくさくさくさくさく  
はれとさくさくさくさくさくさくさく  
とくめさくさくさくさくさくさくさく  
愛せらぬハ片挽きをすさめぬ

有世々百非といふ子よろそ甲西いの子をん  
其紀中道といふおはつて致しつらうん  
そうれふ候談といふとも目あきつら子  
可きと死人あつてはうあははをせ  
—又つらうん中ふつきて已らうとさ  
ま—して評を執らふと物をさう—とれと  
志ひて思ふは白—といひははを一時此  
俳諧あつて—と坎窩由振言

おこめの子書

春

|                |    |
|----------------|----|
| 黄きやほけけ痛してあつり見る | 野棠 |
| うきはまは森てゆきてなまり急 | 方居 |
| 枕子をぬきもゆは寝子の春   | 百燕 |
| 明の戸をそのまゝをや帰る層  | 夕山 |
| 茶はあやや燕の外は柳も来は  | 院南 |
| 並んでハはぬふ柳ふやなく健  | 香介 |

在りて望の落つきや梅のむ 風石  
 卯梅子ひくよそ一め日傘か 林碧  
 神の灯此かて明るよ梅のや 麻交  
 ちくくと星吹出す屋なきが 隻彦  
 家此梅これ花なり川通り 石菫  
 笑つ免てゆるみ付るむのそ 南彦  
 菊苗の君子花 やる此花 大榮  
 心そうふ心志つめやむくもり 槐市

見て居れハ露子あめつく 萱うな 有妻  
 星彩もきつと連ふや松の内 薫洞  
 万葉のふら子甲はく又二宮森か 花熊  
 藪入をうきしーらきて遊ひらり 朱芳  
 人子宿うてとも森や妻乃月 女之  
 田ふらるる母とハあこ来流 志の如 新陽  
 妻もまこ從て暮らりけの水 島丸  
 在るやくつさめ産む 畑ち去 百喜

漂てり人子等のつく波岸来  
 梅令  
 空をや一々驚す等のうへ  
 逸例  
 山嶺やとるゆそおねて啼鳥  
 立角  
 廻米の辺川口や驚ち来  
 起る音  
 新喜のゑ入てとてり此の流  
 鹿太

笈

枝川へ寄りおむるや母とて又は  
 月底

藤は又ぬるれる春之ふ如帰  
 粗文  
 故家明てこれハあふり子規  
 表出  
 ひとつある家をね登行る子  
 古歌  
 ぬすけし子取つきの縁も  
 梅通  
 白和見てけおつるすや螢の光  
 田風  
 内へ出て入おをゆあ月う母  
 壮賞  
 柳まゆ子標よことさる四月か  
 一有  
 燈籠とひきて宿藤もさるゆ  
 夢城

みしうねや吐のあつ川ひと望  
 見あはせてけ燈つらるる葉掛  
 蘇州を庭の小き花牡丹  
 ちつとも葉裏にんをほのまつて  
 花子の影の影うつるや加文川を  
 大守子小娘はどりや垣津帳  
 流てまお子ちるけり栗の花  
 一白子二存もつるを柳掛  
 千障  
 嵐菊  
 雪芽  
 春  
 夕渡  
 杜鰲  
 桃多  
 一橋

風箏ハ根遠くおくや百右のむ  
 森もやとおよや井の波流る  
 大ききいゝても来流をつ盤  
 起つと一と子給仕や初めのを  
 さく不さや糍を結ぶまら音  
 ねを載てあはくまら糍のれ  
 みの矢しと猿の言さやお給  
 うちのちや花のおりる石のく  
 松露  
 日人  
 松竹  
 泉池  
 梅花  
 耕雪女  
 芹舎  
 幻芝



吹よる涼田のすそりほろろ  
 蔓草を引捨てゆくまよかな  
 夏の月を静に照らす常なる

可大  
流風  
孝丸

秋

暮らぬいあそきもなすの春  
 鳴き声ていひあそきぬと秋のりり  
 毛鳴や吸ぬそ人の身ぬ望ぬ

多代め  
流芝  
青沼

鳴きも次代のあそきもくす  
 鳥の足よあそきぬと秋の秋  
 片側の灯籠うつる夜の連枝  
 灯籠の灯をくすのを満ちか  
 軒あそびはどり子来し譚うら  
 跡をいふ人子出逢し烟草  
 夕空や竹も極を秋のうら  
 暮やあそびぬむの笑つて

有希  
佛足  
見沼  
西里  
有人  
楽有  
三種  
成身

豊中子笑魚魚やうれるあ  
 初蘇や煙もひとつ藝子掃  
 右起物子を母のあうりや蘇乃を  
 井戸ひとつあり来りて蘇此中  
 嵐尾草や籠りもて来て杯の端  
 山去子疲ていあれとめくも  
 あはとりて故子さくれり履袴  
 苔子なるや下のするや秋海棠  
 太福

是れとの言つてあることを原  
 比と語てあうりてな〜柳井  
 稲のけて入口せるよき店並  
 蓮子もをそわ眠らんふの月  
 蘇やうとハ花後るそを此月  
 月見うといふて通るや初もあ  
 小菴砧をあ〜あ〜ハ山をうり  
 け好や言つて主人の懐あるき  
 多義

吳明

嵐外

碩希

木木

歩丈

有月

碓嶺

太福

牛子

原臺

柳井

桐並

標道

初柳

閑那

多義

り秋や柳のふもなきはのゆり

老樗

冬

後り樹のふもなきはのゆり

高堂

後々々々々々々々々々々々々々々々

千輪

家つき粗する言や演あとり

左紙

緞提て流る鴨をたう先り里

米海

船頭ぬる葉亮や鴨北中

小圃

をーきのすこー船れて小六月

玄子

鶴うしてハ鶴もこつハターくま

る壺

落葉をやひと燃つ、の夕明り

素花

灰をともふたぬ隣の落葉を

風郎

古本戸のくらくとして落葉を

白乾

子のひくくハまねて尺さる落葉を

府尺

吹よきて籠子のぬもあるねちを

酒入

あくとして落葉のうれ尾花

三草

ふまうる池のさちやれ柳 抱像

のひくとして枯みりの垣の菊 抱像

菊その実のおかれたる持佛也 抱像

秋をやくや尺さそなくるふも出る 丁亥

又母子の顔もほろ又十粒のれ 一亥

馬をよまつる足跡みぬおまの詩 怪筆

ふるよ看る路中覺むや胸りかけ 荻葉

借と先ととある用さの紙子哉 原年

二度之度つひよハ、秋のあるが 茶静

飯捲てり人の氣の境又りり 求吾

煙火もり燈もおくや枕もと 五徳

よみ拵もあつるやあゝの照 玉露

寐るさよもひとおもひく言の由 史碯

そのまゝかをよや藪と塙のうち 由哲

出てゐる月を扇うつ桐の葉 斎子

まごくとい染お杭を指ゆりて 一見

やもやぬり一坪むぐの子 松庄

海たてをいちぢ煙す下夕雲地 梅屋

うゑうゑとのうふるのれ芝 凍梨

眺はれたの藪くハ妻をまき 史子

突つちりてりお後ハ言茶 田華

己の<sup>ワ</sup>屋敷のきいて宿屋の数もふへ 節之

らんきれ魚の人の名て来る 貞祐

市々さくくぬ妻のあがりあ り

虫のをけり一子いく度もくつ 松

花さるーのくおんのけをおりきせて 庄

お空拂ぬ子返さぬあふらす 具

回々町いふら入るりま鞋すれ  
そと市と繫をむすふ一糸一  
院月の着うへ出すあまの加る  
網や苗りも熟釣糸を  
紫うさぬ人う中ての色もく  
畠をふやす 民市所のうら  
中たれぬきの集て神もり  
堤のふら此はふるまあさり

○廿六

白馬ふ酔きてくは豊さ  
夏古子書てわさすは上  
風そ友のあまはあふと成はく  
あまらあらく此る子被おく  
費さあ一太松つまもる松の陰  
神のあまもお守りた出る  
襖おーらうつきよある湯油  
あつきあまはあまのそめ

○廿七

新飯もふく子すゝるぬ狗さきき  
きまひーううたーなます 姉  
くくくと甲子後のやまぬこ  
いまこ子出来ぬ獅子此望り入  
毛見元の月子も出り佐伯り  
門あへよて白子 木 戸  
よ色のけて掙のつめり又松樺  
ややくとれて起る子六つ  
子 華 倉 梨 倉 庄 藝 子

骨をこぼし阿闍梨の泣を囁ひけ  
却轄もの風入をする  
来るおとの人々見子へつ蒸子を  
小子をぬてきの子子飼ふ  
とくうして祿位の支配をぬけり  
まきゆり子も目々川せえ能  
お火豆をぬきく子握斧ふて  
土堤の孝州るるるやを起る  
梨 庄 具 子 摺 之 子

襟巻の榮耀り申すまは此月  
 わけをきりれて志願する事解  
 くらぬとのむねのあはれふらふて  
 安らざるをほねむりし事  
 子 華 之 祿



